

キリスト教における死者の追悼と慰霊

——キリスト教人間学の表現——

ルートヴィヒ・シツク

緒言

前置きとして、この講演はカトリック教会の典礼と教義に限定されているということを申し上げておきたい。東方正教会とプロテスタント教会も病人と死者のための奉事式を行う。この式は多くの点でカトリックの典礼に似ているか、ないしは全く同じである。あらゆるキリスト教社会の儀式を説明するのは本筋ではない。臨終、死、および死後の生命に関して、キリスト教教義に於けるわずかの相違にお気付きになられたりもするであろうが、時間が限られているのでそれについては説明できない。

1. 臨終を迎えた者と死者に関する

カトリック教会の典礼

a. 病人への塗油の秘蹟

キリスト教徒は、人間の生命を、受胎ないし誕生とともに始まる終わりなき永遠の存在であると考えている。生命のそれぞれの、そしてあらゆる相は特別な重要性を有しており、熟考に値するものである。キリスト教会に於ては病人と老人は最初から特別な敬意や尊敬、そして心遣いや看護を享けている。イエスは病人のもとを訪れ癒しを施したのであるが（例えばマルコ第1章29節—39節、第5章21節—34節）、このイエスの為した先例により、キリスト教社会は、人間愛という治癒力のみならず、食物、飲物と薬品をも彼らに施す義務があると感してきた。キリスト教徒の病人に対する看護の一部は、むしろ、病からの回復を祈ること、および人が死を迎えることになると、神により回復を得られるようにという意図による宗教儀式とともに、優美な死の時が訪れ、永遠の救済

が得られることを祈ることである。「あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリブ油を注いで祈ってもらうがよい」(ヤコブの手紙第5章14節—15節)

病人の塗油による聖別の秘蹟——重病人はこれを享けるよう求められているのであるが——が発達してきたのは、実に過去にさかのぼって、このイエスの聖書の教えからなのである(マルコ第6章13節、ルカ第9章6節)。

b. コメンダチオ・アニマエ(Commendatio Animae)

もし病人もしくは老人に死期が迫ってくると、キリスト教徒としての関わりが一層強められる。キリスト教会は死の刻を人生で最も重要な時であると考えている。それは救済かそれとも地獄に落ちるかについての決定的審判の下りる時なのである。これは、イエスが十字架上の死を迎えた時に明らかになったが、ここでは二人の犯罪人がイエスとともに十字架にかけられていた。イエスの右側の男がイエスに向かって言った。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には私を思い出してください。」この男は救われた。左側の盗人は、「口をあけて見とれている」群衆とともにイエスを嘲笑い、イエスの贖罪の約束、すなわち「今日、あなたは私と一緒にパラダイスにいるであろう。」ということには耳を傾けなかった(ルカ第23章39—43節参照)。

キリスト教徒は、自らを救済の共同体と考えているので、臨終

の人々がキリストに立ち返るようすすめる。天に上られた救済者であるキリストのみが、死にゆく者を救済し、永遠の生命を与えたのである。従って、人間の永遠の救済を引き受けることが教会の第一の使命とされている。臨終の人々へ差しのべられる助けは、昔も今もラテン語でコメンダチオ・アニマエ(commendatio animae)と呼ばれているが、これはキリストにその当事者の魂を委ねるという意味である。すなわち厳密に言えば、コメンダチオ・アニマエは、死者に対する慰霊の一部をなしているのではなく、なお病気のケアの機能を持ち、またその上あきらかに臨終の時が近づいているならば、そのような病人を永遠に救済する機能も持っている。古代から、典礼書が, *sequitur*, すなわち葬儀を考慮する直前にコメンダチオ・アニマエを扱っているのは、まさにこの為なのである。しかしながらとはいえ、またそれゆえと言っても、およそ次のように言えるだろう。即ち、教会はコメンダチオ・アニマエを死者の慰霊の一部であると考えている。コメンダチオ・アニマエの本質は、聖書からの聖句、特定の祈り、および臨終を迎えた人とその縁者の両者を慰めるための儀式であり、彼らにキリスト教を頼るようになせるとともに、神の慈悲への信頼を授けるのである。キリストの受難と復活の話は聖句として新訳聖書から引用されるだろう(マタイ第26章1—26、20節、マルコ第14章1—16、20節、ルカ第22章1—24、53節、ヨハネ第18章1—21、25節参照)。ヨハネが言うところのいわゆる「イエスの祈り」(ヨハネ

第17章参照も同様に新約聖書から引用されるであろう。諸聖人の連禱、ロザリオの祈り、教父、教会博士や諸聖人の様々な祈りは、その多くが伝統豊かなものであり、祈りとしてふさわしいものと考えられている。こうした祈りは、「死の前の祈り」と「死の直後の祈り」に分けられる。その儀式には死にゆく者へ洗礼を記念する象徴としての聖水散布およびろうそくの点灯が含まれる。これにより人はキリスト教徒になり永遠の死から救済されるのである。この者は接吻するよう十字架も与えられる。キリストが人類の救世主となられたのはこの十字架の上である。

コメンダチオ・アニマエはキリスト教徒であれば誰が行っても良いが、できれば司祭や助祭によってとりおこなわれる方がよい。状況が許されればだが、親族が立ち会うほうがよい。今日、コメンダチオ・アニマエはカトリック教会の典礼 (*liturgy*) およびその法に従って *Ordo unctiois infirmorum eorumque curae pastoralis* (病める者に対する聖職者の看護) に記述されている。
c. 死者の洗い清めと着替え

「死者を弔う祈り」(これは、できるだけ多くのキリスト教徒が、死去した者への祈りを捧げることができるよう、教会の鐘を鳴らすことでその土地のキリスト教徒に知れわたるようにする。)に続いて、葬儀がとりおこなわれる。これはカトリック教会の典礼およびその法に従って "*ordo exequiarum*" (教会の葬儀) に記述されている。葬儀は洗い清め、着替え、遺体の据え付

け、そしてそれに続く通夜ではじまる。遺体の衣類に関しては特に教会側の規則はない。しかし、司祭や司教は聖なる法衣、修道士の場合は僧衣を着せて埋葬する。すべての死者の手には、希望とキリストによる救済の象徴である、十字架があたえられる。この十字架に加えて、死者の両手にはロザリオ(数珠)がまかれることが多い。時にはこの数珠で十字架の代わりとすることもある。死者の両手は常に祈りの形に組む。

d. 通夜

古代の慣習(これはキリスト教に限らないが)に従って遺体は、死んだその家の中にしばらくの間——一日以上——安置される。この間、人々は遺体を見守る。この儀礼のためのある種の祈祷文が一般に用いられ、「定刻の祈祷」が唱えられることもある。今日では遺体は、法律の定めによって——たいていの場合、死後二〜三時間以内に——霊安室に運ばれる。遺体は、葬式の時まで一〜三日間、そこに安置される。こうした手順のために、地方の教会では死亡した日から葬儀の日までの毎夕、三〇分から六〇分間「通夜の祈り」が親族、隣人や友人によって唱えられる。

e. レクイエム

昔は死者は上記の、祈りのための徹夜の後、教会まで行列をやって運ばれて行くしきたりであった。そして教会で、死者のためのレクイエム即ち死者のためのミサ、聖餐式が始められる習わしであった。当時、遺体の納められた棺は——ふたが開いているこ

ともあつたし閉じられていることもあつたが——人々の目の前に置かれていた。今日のドイツでは遺体が葬式のために教会に運び込まれることはほとんどない。衛生上の理由からである。だが、他の国、例えばイタリアやポーランドやスペインでは、この慣行が今でも広く行われている。しかしながら、葬儀のまず最も重要な部分は、死者を神にとりなすと同時に、キリストが自らの死と復活によって人類の罪を贖ったことを思い起こして行われる死者のためのミサ・聖餐式であることは現在に至るまで常に変わりない。こうして死者は自らの罪から解放され永遠の生命に入ることができるのである。

f. 葬 儀

レクイエム(それは、葬式の後にも行われることがある)の次が埋葬である。それは教会あるいは霊安室で始まり、そこでまず遺体はお香をたきしめ聖水を振りかけ祈祷が死者のために唱えられる。次に遺体は、厳かな行列とともに、墓地に運ばれる。墓穴に下ろす前後に遺体にはもう一度お香がたかれる。それは生きている間、「汝らの身の内に宿る聖霊の宮」(コリント人への第一の手紙第6章、19節)であつた遺体を尊いものにするためである。そして、それと同時に、棺の上には、この後に来る腐敗を表すための土がまかれる。遺体には、洗礼を想起させるべく聖水が振りかけられる。そして司祭が救世主イエス・キリストのことをあらわす十字架を、死者とその親族に示すのであるが、死者はイエス・キ

リストによって永遠の命を授かることになる。

キリスト教信仰にとって土葬は最も適切な葬儀の方法である。(遺体を尊いものにし、遺体という物質が残って復活を待つということを強調することが一番適切である。)しかし火葬や海に沈めるといふ手段も可能である。

g. 墓の整備

墓の整備もキリスト教においては、死者を慰霊する行為の一部である。墓地は教区の所有となつているが、十字架や聖母マリアの銅像(特にピエタ)で飾られている。親族が個々の墓の上に立てた、石や木で作つた十字架には故人の名前や生年月日、死亡年月日を書いてあるが、十字架を立てる意味は、イエス・キリストに対する信仰があるということを示している。死者に敬意を表し、その人をいつまでも想うために、死後何十年の間、墓は花や花環、ろうそくで飾られる。時には大きな墓石が建てられるが、たいていの場合金持ちの墓石で、イエスの復活の様子が刻まれている。またさらに、その死者を描いたものが(リアルか象徴的かのいずれかで)墓石に刻まれた。つまり、その人もキリストと一緒に復活する存在であることを示すためである。たいてい墓地は教会のそばにあつたが(今ではそういう事はだんだん少なくなつていゝ)、その理由は、イエスはいつとも教会におられるので、死者はイエスのそばで復活を待ちたいからである。従つて司教、司祭、また地方豪族、貴族たちは教会の庭に葬られることもあつた。今

日では司教のみ自身の大聖堂に墓が作られる。

h. 死者の追悼記念式

葬式儀式の一部は葬式の二週間後そして四週間後礼拝行事（お経をあげること）をしたということである。その後は死者の記念日（毎年）の記念式典にお経をあげた。このような記念日には親族、友人、知り合いが教会に集まり、神に対するとりなしの祈りをして、死者を想い、お互いに慰めあうのである。

2. キリスト教人間学

——臨終を迎えた者と死者に関する典礼の本質

a. 旧約聖書とギリシア哲学——キリスト教人間学の起源
臨終を迎えた者に対するケアと死者に対する追悼はキリスト教人間学を表現している。キリスト教人間学は、自然および人間の間存に関するユダヤ人とギリシア人の思想に基づいている。それにもかかわらず、キリスト教人間学は独自で創り出した概念を持っている。その起源によると、人間の死とその結果に関するキリスト教の観念は、旧約聖書から発展したのだが、ギリシア哲学から得たものもある。ソクラテス、プラトン、そしてアリストテレスにとって、靈魂こそ人間にとって必須であり生命の根源である。しかしながら、肉体は単に靈魂の器であり、閉じ込めておく牢獄なのである。それは下位のものであり、結局、死によって破壊される。死において靈魂は「やっとのこと」で、肉体から釈放さ

れ、自由に考え楽しみ始めることができる。二元論的見解は、肉体と靈魂の関係に対するこのギリシア人の態度に基づいている。このほか、ギリシア哲学は、死後の人間としての人格が存続することを、はっきりと表現していない。ギリシア哲学者の中には、明白に死が人格を破壊し、人間存在を消滅させると、そして死者の靈魂は、個々の人間の特徴を失くした単子（モノイド）あるいは *ousis* になると教えた者もいる。キリスト教神父や教会博士でギリシア人の肉体軽視、および人間の死に於ける、最終的に個人の人格も破壊されるに至るといふギリシア思想を引き継いだ者は一人もいなかった。あらゆる人の人格の永遠の生命という「肉体復活」表現は、まさに最初からのキリスト教徒のクレド（使徒信条、お唱え文）の一部であった。しかし、多くのキリスト教の著述家たちは「慰めの書」、例えばミラノの聖アンブロシウスは『良き死者たち』に於いて、あるいは聖アウグスチヌスは『神国論十三巻』と『告白七と十』に於いて、靈魂の牢獄としての肉体、および死に於ける魂の解放というギリシアの概念を採用した。しかしながら、その意味するところは、死とは肉体の解放であり、肉体は苦しみ、邪悪や罪に陥りがちであり死んでしまうもの、ということである。彼らの意図は、キリスト教徒から、朽ち果てる人間の肉体の死の恐怖を取り去り、神とともにいます命が永遠に幸せなのであると主張することであった。個人としてのあらゆる人格が永遠の生命を持つということの表現としての肉体の復活

に対する信仰はユダヤ教に根ざしている。旧約聖書は、ユダヤ人が人間を靈魂／霊と肉体の統一体とみなしている事を示している。その死において、統一体としての個人は死に、専ら別の世界で生き続けるのである。旧約聖書の初期のテキストは、主として現世に言及している。現世では、人は働き、人生を楽しみ、神を崇め、隣人を助けなければならない。死後の生活については推測すべきではなく、それにもかかわらず人は死後も生き続けると教えている。人は、死者または影の領域であるシェオール（黄泉の国）に移されるか、あるいはただ祖先のもとへ帰るだけである。そしてそこで生き続ける。しかしシェオールでの生活は、現世の生活に比べると劣った影の存在である。イスラエルの神ヤハウェは影の領域の主人として、死者たちを地界から連れ出し、生き返らせることができる。これは最初からイスラエル人の信じているところであった。しかしそれは個々の人が現世の生および死すべき体を回復させることを意味している。例えばイエスの生きていた時、ユダヤ人たちはエノック（シラクの子第44章16節、第49章14節参照）やエリヤ（シラクの子第48章10―12節、マタイ第16章14節参照）が、救世主の到来を告げるために生き返ると考えていた。だから死者の復活に関する旧約の考えは、クリスチャンの信仰とは著しく異なっている。紀元前三―二世紀、ギリシアの影響でイスラエルは死後の生についての信仰をさらに発展させた。ただし、ギリシア的な体と霊の分割を受け容れることはなかった。マカバイ記や知恵の書、

旧約の比較的新しいテキストのダニエル書などには霊が天上で、あるいは神とともに地上や影の領域で可能なよりも、もっと幸せな状態で生き続けるというギリシア的な考えがある。この考えでは霊が人間としての全存在を表している。しかし神のもとで生き続けることはイスラエルの正しい人にか叶えられない。「正しい人の霊は神の手にあり、いかなる苦痛も彼らには及ばない（ツロモンの知恵第3章1節）。イスラエル以外の国々は考えられていなかった。

b. イエス・キリストおよび死と復活についての彼の教え
イエスが生きていた時に、パリサイ人は死者の復活という信念を確固としたものにした。他方、サドカイ人は、その信念を、つまりまぬ流行だとして否定した（マタイ第22章23―33節）。イエスはどちらの態度もとらなかった。イエスは、サドカイ人とは対照的に、死者の復活という信念を容認したが、他方で、心正しいユダヤ人の場合にのみあらゆる種類の「現世の」生命が存続するとした。パリサイ人とも対立した。イエスは普遍的な復活への信念、全人類の生命が神によってもたらされる新しく蘇生した存在となって存続するという信念をもっていたのである。天上に復活した死者のことによつて、イエスはパリサイ人とサドカイ人にこう言った、「彼ら（死者）は娶ったり、嫁ついたりすることもなく、天にいる御使いのようなものだ」（マタイ第22章32―33節）と。さらにイエスはこう宣言した、たとえあらゆる死者が復活するにしても天

に召され平和に幸せに暮らすのは、神にとって心正しい者のみである、と。他方、罪人は、地獄の責苦を永遠に受けることになるであろう、と。死後の神の裁きは、神に従い、神の意志を行うのか、それとも神に逆らうのかを決める時期である、その人の現世での生き方をもとに、その人間が救済されるか地獄に落ちるかを決定するのである（マタイ第25章31―46節）。教会の教義では、イエスは、行動は法にそって正しいが、心が罪に穢れた死者に対して煉獄での罪障消滅を宣言したという。死者は煉獄において清められ、天国へ行く準備をすであろう、と。この世に生きているキリスト教信者は、祈りと捧げものをすることによって、死者の魂ができるだけ速やかに天国に召されるように、煉獄にいる死者の魂を助けることができる。この見解は旧約聖書「マカバイ記」第2部ですでに展開されている。「彼（高潔なユダ）は、次いで各人から金を集め、その額、銀二、〇〇〇ドラクメを贖罪の献げ物のためにエルサレムへ送った。それは死者の復活に思いを巡らす彼の、実に立派で高尚な行いであった。もし彼が、戦死者の復活することを期待していなかったなら、死者のため祈るということでは、余計なことであり、愚かしい行為であつたらう。だが彼は、敬虔な心を抱いて眠りについた人々のために備えられている素晴らしい恵みに目を留めていた。その思いはまことに宗教的、かつ敬虔なものであつた。そういうわけで、彼は死者が罪から解かれるよう彼らのために贖いの生贄を献げたのである。」（マカバイ記

2 第12章43―45節

死者の復活に関するイエスの言葉を除くと、死後の生命の存続に関するキリスト教の考え方にとって重要なのは、ヨハネによる福音書（第20・21章）と並んで共観福音書のマタイ・マルコ・ルカ福音書である。その理由は、正しい人の死後の生活は復活されたイエス・キリストの生活と同様であるためである。これらの伝福音書は、一度蘇った人々は、この世に生きている人々と全く同じであるが、それでも同一とはいえず非常に異なる形である、という事を明示している。たとえ、復活されたイエスが弟子によってキリストその人だと認められても（現世の人々と全く同じだとしても）、イエスはやはり閉ざされたドアや壁を通り抜けて歩くことができるのだ（ヨハネ第20章19節、20章26節）。死と復活についてのイエスの言葉や、復活したイエスについての記述によると、死後の生活も個人の人間生活であり、決して個性も人間的特質もなくなつた生活ではない、ということが明らかになつている。復活したイエス・キリストは弟子とともに食べたり飲んだりし、神の王国を、食事、結婚式やその他の祝宴や慶び事を比較したが、それらは人間だけが楽しむものである。また、新約聖書の記述によると、地獄の苦しみも人間だけが被るものである。

c. 死亡したキリスト教徒についてのパウロの書簡

特に聖パウロはその書簡の中で、死および復活した者たちの特性をより厳密に述べているが、キリスト教徒のことのみ述べてい

る。キリスト教徒は死ぬとまっすぐに神のおそばにいるキリストの御許に行く。キリスト教徒にとって、その方が地上で生きるよりも良いのである。聖パウロは自分自身について、「わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることである。」(ピリピ人の手紙 第1章21節)と記している。天国に於ける死者のよろこびは、神を愛し、賞賛するため全ての罪の贖われた者といることによって得られる。死者は復活したイエス・キリストと同じように神とともに暮らす。ローマ人への手紙(第8章11節)の中で、聖パウロは次のように記している。「もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊があなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだを、生かしてくださるだろう。」と。聖パウロは、この世で生きている人々と、あの世で生きている人々が本質的に同一であるとはつきり述べているが、復活した肉体がどのようになるのか、ということを書いていない。「コリント人への手紙」の中で彼は次のように記している。「しかし、ある人は言うだろう。『どんなふうにして死人がよみがえるのか。どんなからだをしてくるのか』愚かな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。……死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないようによみがえり……肉体のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のか

らだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。」と。(コリント人への第一の手紙第15章35―44節)さらに、聖パウロはコリント人への手紙15章で次のように記している。

「ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては眠り続けるのではない。終わりのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちる者は必ず朽ちないものを着、この死ぬ者は必ず死なないものを着ることになるからである。この、朽ちるものが、朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。死は勝利にのみこまれてしまった」(コリント人への第一の手紙第15章51―54節)キリストが帰って来られた時にのみ、全ての死者が復活するのである。個人の死と全人類の復活の間の時間は「待ち時間」なのである。聖パウロによると、それがどうしても必要とされるのは、キリストの弟子たちが苦しみや罪、邪悪と戦っているうちは誰も永遠の至福を享受できないからである。最後の審判の日にのみ、神による救いを得た者全てにとって永遠の幸福が始まるのである。

要約すると、新約聖書は次の点を明確に述べている。

1. 全ての死者の生命の復活と存続。
2. 裁きが死の直後にあり、それによって神と共にある永遠の

生命が与えられるか、あるいは未来永劫に地獄に落ちるか、定まること。裁きにあたって考慮される主要部分は次の如くである。即ち、地上で生きている間、その者が神を信じ神の教えを守り、隣人を愛したかどうか、である。

3. 復活の結果おこること、すなわち肉体と精神とを含む完全な人間の生命の存続。

4. 最後の審判の日が来る前に、いかなる人にも究極の至福は全ての人々に授けられないであろう。その日、すべてのことがキリストに於て復活し、神の霊がゆきわたるのである。

d. 死者の復活についての、聖トマス・アキナスの言葉
福音書を記した者たちは死と死後の人間の生命の継続について新しい考えを展開してきた。

しかしながら、長期に亘って一つの重要な問題が未解決のままになっていた。それは死後永遠の生命を得るために、なぜ体が必要なのかという疑問、ギリシア哲学による魂の永遠の命ではなぜ不十分なのか、キリスト教徒はなぜ体あるいは肉体の復活の正当性を主張するのか、という疑問である。トマス・アキナスによって初めて、死と、死者あるいは肉体の復活という問題に、一つ一つの解決が与えられた。彼はアリストテレス的な身体の形相としての靈魂という考え方に新しい解釈を補足して述べた。

彼が言うのに、人間とは肉体と精神から構成されているもので、その二つが一つになって、しかも一つになってのみ、その人の本

質と人格というものを作りあげている。身体なくして精神は存在しないし、精神なくして体は存在しない。なかならずギリシア哲学の靈魂二元論に反して、精神は身体なくして存在することはあり得ないとすることを強調することが大事であった。トマスによると、ここらとは身体の構成が精神の本質であるという、つまり、身体の形相としての靈魂である。精神が存在するのは、まさにこの理由のためだけである。もし身体がなければ、精神は意味をなさないし、それゆえに存在しないということになる。そのことから彼は次のように結論している。この世に存在する肉体が、死によって腐敗するとき、精神はまた別の身体を必要としなければならぬ。しかしトマスによると、永遠の生命を得るためには、肉体も必要である。なぜなら、身体が人間と宇宙、また人間と神をつなぐものであるからである。生きている間も、死んだ後も人間が神と信者、宇宙を結びつけることができるのは、靈肉一体の存在としてのみである。人は死後も生き、より強烈に生きなければならぬならば、死後の全き人間の生命の維持である「肉体の復活」が必要となるのである。また地獄の苦しみは、肉体を持った人間のみが味わう。その苦しみは存命中、その死者が意識的かつ意図的に、そして常に神と人間との結びつきを拒絶し、神と隣人の愛をはねつけたため、罰として、神と人間との結びつきが断たれ、神から愛されるということもなくなったことから来るのである。人が生きている間中意識的かつ意図的に神やあらゆる隣人

に逆らうということは考えられないので、地獄は満員になってあふれることはないであろう。天国と地獄についての教義は、確固として神の意志に従って生きるといふことの結果を鑑みた教えとして理解されなければならない。

もう一つ誤解を避けなければならない。即ち、肉体の復活を信ずることは、人が肉や血、骨、内臓を持って生きるといふ意味ではない。物質は終局的に朽ちてしまう。肉体の復活は、地上と天国にいる人間が一体であること、および死者と神、人間、宇宙との良好な関係が保たれていたり(天国)、その関係が断たれていたり(地獄)することを表しているのである。

3. 要 約

死を迎えようとしている人間と死者の儀式はキリスト教徒の次の概念を表現するものである。即ち、

あらゆる人が神を求め、隣人を愛していこうとする気持ちを持つこと
の価値と社会的性格、

あらゆる人と人との人間同士のつながり、全人類と神や宇宙とのつながり、

人生の最も重要な時としての死、

死後の個々の生命の継続、

個々の人に対する神の裁きがあり、それが天国行きか地獄行きかを決定すること、

最後の審判、即ちキリストの再来、そしてキリストは全ての死者を一緒にまとめ、まだ生きている人々を生まれかわらせるといふこと、

そして神の王国の完成。キリスト教の人間学の影響を受けて、死を迎えようとしている人々に対するケア、死者への儀式、死者への追悼が論理的な形で発展してきた。今日、死に臨んでいる人々や死者に対しての典礼にはこうした人間についての概念が保持されていることが知られている。キリスト教が思考するような人間の尊重は、それがより一般化しようがしまいが、それとかわりなく、しだいになくなってきた。それとともにキリスト教徒の生活は退廃しようとしている。教会は、死者への追悼記念ばかりでなく、死者への追悼記念のみならず、死を迎えた者および死者へのキリスト教儀式を守り強化し、また人間生活のあらゆる局面を通して人生の価値とキリスト教徒の生き方を限りなく尊重していくよう力を尽くしている。

(フルダ神学大学理事長代理)

(この発題論文の翻訳は四天王子国際仏教大学の(翻訳者) 三好康子、石田陽子、山崎英一、城江良和、紅子メイソン、加藤彰彦、氏原寛、長沢規子、富塚俊夫、桧富美香、佐藤良一(再校正) 責任者・三好康子の協力によるものです。)